
非日常は突然に

天草@四郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

非日常は突然に

【Nコード】

N2975Q

【作者名】

天草@四郎

【あらすじ】

なんじゃこりゃあ!!!!!!

魔法？機械？自衛隊？能力者？

様々な文明の様々な能力がごっちゃまぜになってる惑星absorption planet（吸収する惑星）

に地球が吸い込まれた??

さあ、魔法やレーザーやミサイル、重力攻撃。

主人公達はこの中をどう生き残る???.?

プロフィール

俺の名前は三珠 翔（みたま かける）
現在18歳の大学生だ。まあ、何処にでもいる一般Peopleだな。特技は親父に教えてもらったボクシングと空手。
ちなみに両親は航空自衛隊の仕事でイラクに行ってる。母はその看護婦ね。

普段は優しいがキレると危険！（。O。）！

神山 珪吾（かみやま けいご）

翔と同じく18歳。喧嘩が強く、中学生のころは学校の頭。いざという時に頭がキレる。

赤茶色の髪の毛が特徴。

両親は、離婚してしまい今は母に育ててもらってる

翔の親友

始まりは突然に

僅かに開いたカーテンの隙間から差し込む光に俺はうつすらと目を開けた。

カーテンを閉めてもう一度寝ようとするが、既に頭はスッキリしている。寝れずにまた目を開ける。

「フワアアアアー」

大きく伸びをして、布団から体を起こす。枕元に置いてある青い携帯の時計で、時間を確認すると10時58分という表示が。

いつもより1時間くらい寝坊しちまったな。

そんな事を考えながら、俺は顔を洗うために洗面所へ向かう。今日の朝飯はパンとヨーグルトと珈琲かな。

朝ご飯のメニューを選び、顔を洗う。10月の水道の水は少し冷たいが、そのおかげで残っていた眠気も綺麗に吹き飛んだ。

リビングに向かう途中に通るキッチンでパンをセットする。

だいたいいつも800ワットで10分ぐらいだからと横に置いてある無。良品のシンプルなタイマーを10分にセットする。

それから、リビングに向かうと、そこに赤茶色の物体が……

「その、正体不明の赤茶君。今から3秒以内に起きないと警察に

通報するぞ

321どーん」

俺は一息で3つ数える。

そして、そのまま電話に向かい、『110』と押す。…振りをする。

「あの、〇〇市×× 3-19-19-203ですが朝起きたら家に「ちよつと待てオラアアアア！」不法侵入者が…えっ」

いきなり誰かの怒鳴り声が聞こえたと思ったら次の瞬間には床とキスをしていた。

「今のは間違えですツツツ。」

と、俺の上から切羽詰まった声が聞こえてきた。

電話繋がってないのに必死になっちゃって。

俺は心の中で大笑いしていると腹を踏まれた。

何？なぜ、俺の考えている事が分かった？まさか、てて、テレパシ
ー！？

そんな事を考えたら上から

「お前の顔に書いてあるわー！！」

という珪吾の怒った声が聞こえてきた。

とまあ、普通？の朝を送っていると、俺は重大な事に気づいた。

「やべえ！！！！パン忘れてた」

まだ、間に合う。急げ俺！

そして、キッチンのタイマーを見ると

『37分28秒』

と書かれたタイマーがあった。

????? What????

確か10分にセットしたはず。あれ？タイマーって時間が少なくな
っていくんじゃないか？

俺が常識ってなんだ？と考えていると、

珪吾がつけてるテレビから慌てたニュースキャスターの声。

「緊急速報です。た、只今、世界中の時刻が狂いました。原因につ
いては、今、な、NASAが調査中です。」

そのあとも、ニュースキャスターは何かいっていたが俺の耳には入
って来なかった。

頭の中で何かが壊れた気がした。

事の動きは突然に

ひとまず、いろいろな事がありすぎて、すっかり忘れさられていた黒焦げのパンを二人は美味しく頂き、そのあと会議を開く事にした。

「ひとまず、これから先どうする？」

「うーん。ひとまず時間が分からなくて困る事はとくにないからなあ」

これらの会話からも分かる通り正直時間が分からなくても俺らは好きな時に好きな事をやっているの、あまり困らない。

「んじゃあ、バイクでひとつ走りどっかに行きますか？」俺が聞いてみると珪吾は

「いいんじゃない」

と言ったので、俺らはバイクで町を走り回る事にした。

――――

バイクで道路を走ると心地好い風が顔に当たる。隣では、同じように並走している珪吾の姿が。

これという目的地を決めている訳ではないので、今はただ国道256号線を30キロオーバーのスピードで走り抜けてる。

そう。普段からこの田舎の道路は交通量が少ないのだが、今日はおかしいくらいに少ない。そろそろ、家を出てから30分近く経つのだが、まだ人っ子一人見ていない。

いつもは小学生ぐらいの子が走り回ってるのにな。まさか、さっきの時間が狂ったのが関係してるとか？

俺はそんな、人のいない道を走りながらふと思った。
だが、それでも人一人いないのは少しおかしくないか？

いくら考えても答えが出そうにないのでいったんそれについて考えるのをやめる。

あれからどれくらいたっただろうか？時計がないから分からないが、多分1時間30分位だろう。

珪吾としばらく話ながら走っていると、どうもおかしな場所に出てきた。

「なあ珪吾。」

「なんだ？」

「これってなんかおかしくないか？」

「奇遇だな。俺もそう思ってたところだ。」

よかった。どうやら違和感を感じているのは俺だけじゃあないようだ。

いきなり道路の直線上に森があるなんて事が有り得るだろうか？しかも、ここは国が管理してる国道。

田舎だから、いくつかぼろい道が森に続いてる事はあるが、それは舗装された道がしだいに細くぼろくなっていくのであって、このように、舗装されたまま森に入っていく道は見たことがない。

ましてや街頭を取り付けないなんて事があっていいのだろうか？昼間なのにその奥は薄暗く夜なんて一人では、絶対に入れない……

……………そう、一人では。

人間という生き物は個人だと弱いが、集団になったとたん強気になる。俺らも人間、その不思議な道の先に何があるか気になって仕方がなかった。

「おい、珪吾（翔）この先がどうなってるか気にならない？」

見事にハモった。

どうやら俺達は同じ思考を持っているらしかった。

――――

しばらく道路に沿って歩いて行くと、段々と道路の上に土が乗り出し、今では所々に灰色のコンクリートが見える位に土の量が多くなっていた。

「俺思うに、これ以上このまま進むと間違いなく迷うぞ。」

俺が言うと珪吾は一つ頷いて、

「確かにな。んじゃあ、あそこにあるでつかい石でも持ってきて目印にしとくか。」

珪吾が指をさした先には二人でなんとか動かせそうな大きな石があった。

「んじゃあ運ぶぞ。」

俺がせーのと掛け声をかけると

「ウオリヤアアアああ！！！」

二人で思いつきり力を入れる。

「後少しだアアアああ！！！」

5mぐらい押すと二人の腕がプルプルと震えだす。

「ファイトー！！！！！」

「一発ウウウ!!!」

最後の力を振り絞ってなんとか道の真ん中に置く事が出来た。ちなみに石の大きさは50cmぐらい。

「ふうー。疲れた。」

「だな。」

二人は達成感に浸りながら石の前に腰を下ろしていた。しばらく経つと珪吾が

「なんか静かな森だな。」と言ってきた。

確かにそのとうりだと思う。

時々、鳥の鳴き声らしきものは聞こえてくるが、それは、どれも聞いたことの無いものばかり。

そして、ときより聞こえる

「ウヒヨッッウヒヨッ」

なんていう鳴き声はもはや生物としてどうかと思う。

「それにしても、薄気味悪い森だな」

俺が言うと珪吾は

「ああ、全くだ」

と同意してきた。

そして、さっきの鳴き声はなんだろう。と珪吾に聞こうとして口を

開きかけた瞬間……火の玉が飛んできた。
それは俺と珪吾の間にある岩を砕くとそのまま後ろの方に消えてった。

「な、なんださっきのは？」

切羽詰まった様子で珪吾が聞いてくる。

「知るわけねーだろ。俺が聞きたいくらいだ。」

勿論、俺に今の火の玉の正体分かるはずもなく慌てて立ち上がる。

「おい、一先ず走るぞ。」

ありとあらゆる疑問詞が頭の中の思考を押し潰そうとしてくるが、なんとかそれらを整理して今一番しなければならない事を考える。

「あ、ああ。」

珪吾もなんとか思考を止めて立ち上がる。

そして走りだそうとしたら次は氷の塊が足元の土をえぐりコンクリートを削った。

「痛つてえツツツ」

細かく砕かれたコンクリートの破片が俺の腕の皮膚を切る。

「だ、大丈夫か翔！」

珪吾が慌てて聞いてくるが、俺は

「早く走れ！！」

といって走りだす。

だが走り出した俺達の足元にテレビで見たことのある丸の中に星やら文字やらが入っている魔法陣と呼ばれるものが急に現れた。すると、そこからいかにも体に悪そうな紫色の煙が噴き出してくる。

「うわっぶ。なんじゃこりゃー」

どうやら、今の俺と同じ状況にあるらしく隣にいるはずの（煙で見えない）珪吾から情けない声が聞こえてくる。

もし、これが毒だったらあいつ死んでるな。

俺は何だかはつきりしない意識のなかでふとそう思った。そして

ドサッ

という2つの何かが倒れる音がしたと思ったらそのまま意識が薄れていく。

地面に倒れた状態で目の前に真っ黒な靴が見えたと思ったらそのまま、俺は闇に沈んでいった。

異世界は突然に

「……………い……………か……………」

？何だろうついかるって？

「い……………か……………ける……………おき……………」

うーんさつきよりはつきり聞こえるけど本当になんだろう？

俺は暗闇の中に意識を沈めたまま考えていた。

「おい！翔！起きろ！！」

「うわツツツ！！」

さつきとは桁違いの大きな声に俺は飛び起きた。

「ど、どうした？翔…ってあれ？ここ何処？」

暗闇から叩きだされた俺の視界に突如見たことのない白い天井が。

確か、魔法陣が現れてから意識がなくなっただんだよな。

俺の脳内にある最新の記憶を呼び覚ましていると更に不思議な物が目に飛び込んできた。

「鉄格子？」

なぜ？と考えると、横から声が。

「どうやら捕まったみたいだ。」

一瞬全ての思考回路が止まった。

「捕まっただってなんで？」

「知るか」

やはり。珪吾だって出来れば教えて欲しいくらいだろう。

もしや、今までの酒がばれた？ だけどアルコール入ってないのだから別に捕まる対象にはならないと思うけど。

ぐるり と室内を見渡してみるとそこには1台のベットとトイレ、洗面器というあまりにも殺風景な光景が。… てか、このベットどう見てもシングルベッドだぞ。まさかこれに二人で寝るのか？

俺がその事について珪吾に話かけていたら、ガチャッと牢屋？の鍵が開く音がした。

「おい。囚人番号0278と0279。ついてこい。」

どうやら本当に捕まっただみだ。

「ちょっと待てよ！？なんで俺らが捕まなくちゃいけないんだよ
！！」

「そつだ！！！さっさと解放しろ」

明らかにふざけてる。てか基本的人権尊重しろよ。

俺は試しに暴れてみるが、看守らしき人はそのまま俺らに手錠を付けて無視して引きずって行こうとする。

「てめえッ、ふざけんなよ!!」

とうとう珪吾がブチ切れたらしく看守に殴り掛かる。よっしゃあ珪吾。そのまま気絶させちまえ。

俺は心の中で珪吾にエールを送るが、その期待は見事に外れる。

なぜならば、看守の顔に拳がぶつかりかけた瞬間に看守は顔を僅かに反らしたからだ。

「一先ずついてこい。」

ゾクツツツ!!

やばい、さっきまでの表情とは大違い。俺らは看守の殺気に当てられてすくんでしまった。

決して珪吾が弱い訳ではない。

今のパンチだってスピードはプロボクサー並だったしましてや珪吾は全日本大学生格闘選手権の上位5番には入ってくるほどの実力者俺だって格闘技をやっていた訳だし、そこの不良が3、4人束になってかかって来ても、十分勝てる位の实力はある。

こいつは正真正銘の化け物だ。俺ら二人はそう思った。その後抗う気力を削がれた俺らはおとなしくついてく。

通路の左右には2つずつ部屋がついてる。それらを5部屋分過ぎた時、看守は正面にある部屋の前で止まった。

そして軽くノックをして

「失礼します。」

と言いだアを開ける。開かれた扉の先には、さっき俺らがいたような部屋が広がっていた。だが、鉄格子は着いてなく家具も沢山置いてある。

そして向かって右側、窓の側に設置してある、机かてか、今声出してた?! ねえ珪吾ツツ俺声出してた? ま、まさかテレパシー! ?
」

どうやら、珪吾が前言った顔に出やすいというのは本当らしい。

珪吾がキョトンとして、こっちを向く。どうやら声には出てなかったらしい。

今日は変な事ばかり起こる。」

試しに心の中でR18の想像をしてみると

「キモ。変態死ね。」

と、言われた。

まさか、こんなに顔に出やすいとは…さすがにショックをうける。

「ま、そーゆー事だから。今から嘘ついても無駄。」

「いやいやいやいや。ちょっとおかしいでしょ。話についていけないんですけど。」

まあ、当然といえば当然だ。こんな一方的な会話、まともに分かる人がいたら一先ず会ってみたい。

「珪吾。なんか心のなかで思ってみろ。」「うん？なんで？」

「まあ、いいから。」

そして、少し間が開いたあと少年が

「密入国したから。」

と言った。どうやら珪吾はなんで捕まったのか心の中で考えたらしい。

「密入国なんてしてないけど？」

「え？考えてること読まれた？」

二人の異なる疑問が同時に二人の口から飛び出す。

珪吾まで読まれたという事はテレパシーというのは本当にあるのか
もしれない。

少年はめんどくさそうに、

「密入国の件はあとでじっくり話し合う。それからお前らテレパシ
ーも知らないのか？」

と言った。

「いや、知ってたら逆に変でしょ。ここは、何処の魔法王国だよ？

ありえねー。」

いきなりテレパシーとか、やめてほしいわ。どうせ最新の科学技術だろ。

「はっ？科学？何それ？」

どうやらこの少年はおかしいようだ。

「いや、魔法も知らないお前らに言われたくないね。」

「勝手に人の心読むのやめろ！」

これこそ不法侵入だ。

「はあ、もういいよ。さっさと尋問してくれ。そして早く誤解を解いてくれ。」

根本的にこの少年とは違う気がしてきた俺は、もうめんどくさくなつたので尋問をつけることにした。

—————

さっきからフリーズしていた珪吾をなんとか正常にもどして、目の前にある椅子にすわる。

どうやら、何も答えなくていいらしい。なんか、少年曰く俺らの頭の中にある記憶をテレパシーとかやらで読み取るらしい。

こんな事が出来れば、犯罪は減るのに。
そんな事を考えていると、少年が

「気をらくにしろ。」

と言ってきたので言われたとつりにする。「それじゃあ初めるぞ。」
少年は、一言声をかける。

「あ、それと俺はアサギ マルク。よろしく。」

何だか、向こうは敵意が無いように見える。勝手に牢屋に入れられたのは別にして。

てか、何処の人？苗字は日本っぽくて、名前は外国っぽい。

「俺は三珠翔で、こっちのが神山珪吾だから。」

名乗られたらこちらにも名乗る。それは常識だ。
それから、気になった事も聞いてみる。

「マルクって何処の出身？」

「まあ、ちよつと待て。」

俺は、それくらい今教えてくれてよくね？と思った。
マルクは続ける。

「今記憶を読んでみたけどそれも含めて話をしないといけないみたいだ。」

「速ッ！」

珪吾がツッコんだ。

どうやら今の会話の中で俺らの頭の中をテレパシーで読んだらしい。珪吾のツッコミにはあまり反応せずにマルクは話を続ける。

「驚くと思うが、静かに聞いててくれ。まず、ここは君達がいた地球という世界とは違う。」

珪吾は

「何だつてえ???!!」と頭からクエスチョンマークを出しながら驚いていた。

まあ、信じたくはなかったけどここにくるはめとなった変な森やら火の玉、魔法陣。そして、マルクのテレパシーなどここが異世界だという事を裏付ける証拠は嫌というほどある。

俺は、さっきまでは、テレパシーをあんなに否定してたのに、この現実を意外にもすんなり受け入れることが出来た。

本当は俺の表面が否定していただけであって、心の奥のほうでは受け入れてたのかもしれないな。

そんな事を考えながら俺は次の言葉を待つ。

「ほう、翔は驚かないか。さっきはあんなに否定してたのに。」

「まあな、その裏付けは沢山あったからな。」

そしてまた、マルクが話し出す。

「と、いうわけだ。」

ようやく話が終わった。

どうやら、ここはハーフティンという惑星らしい。

そして、俺らがここに来れた理由は『星達の集う星』と呼ばれる惑星を吸収してしまう星に地球を吸収されてしまったかららしい。

そして、マルク達の住んでるハーフティンも35年前に吸収されたらしい。

他にも、300以上の惑星が吸収されたりしくて、それらの共通点に全ての星に生物が住んでると、いう事らしい。

そして、各惑星の間にはゲートと呼ばれる移動装置がいくつもあるらしく、さっきの森がそれだったらしい。

そして、最近はそのゲートを使って他の惑星に戦争をしに行く惑星も少なくないという。どうやら、俺達はその偵察だと思われたらしい。

「だから、さっきは勘違いして強引に捕まえたりしてすまなかった。」

「

俺と珪吾は顔を見合わせ、

「ならしょうがないな。」

と言った。

そして珪吾は

「でさ、あの火の玉とかって魔法なんでしょ？なら、俺達にも使えないかな？」

と聞いた。

俺もそれは思っていたことで、使えるなら使ってみたい。
俺達がマルクに聞いてみると、彼は

「そもそも魔法はこの世界の空気中に含まれている魔素と呼ばれる物質を体に取り込みそれを体内で凝縮、濃密度のエネルギーに変換させ、手などを発射装置にして打ち出すものだから、多分出来るよ。」

と、説明をした。

「ま、まじでか！」

まさか、使えるとは思ってなかった俺らははしゃぐ。

「ただし、濃密度に凝縮させた、魔素のエネルギーは体内で莫大なエネルギーとなる。それがどういう事か分かるか？」

今だにはしゃいでいた二人にマルクは問い掛ける。

俺らが首を横に振ると、マルクは一拍間を空けてから

「つまりだ、凝縮させたその魔素エネルギーをそのまま体内から放出すれば魔法として体の一部から出すまでに体内が溶ける事になる。」

俺は背筋に冷たいものが走るのを感じた。

「ただし、そんな事はまずありえない。なぜなら…」

そこまで魔素エネルギーを凝縮できる実力の持ち主がない。簡単にいうと、人間の成人男性が取り込める魔素が10だとして、自らの体内を溶かすに必要な魔素が500だ。つまり大の大人が50人集まってようやく集まる量の魔力が必要なのだ。」

なんか心配して損をした。

「まあ、やってみないと分からないだろうから一先ず闘技場に向かうぞ。」

へえ、闘技場まであるんだ。

「まあな。ほら、そこに地下に向かう階段があるだろ。」

俺の心を読んだらしく部屋の隅を指差す。

「あそこから行くんだ。」

指差された先にあつた階段をみて俺はいった。

「なんか、ぼろくね？」

そう、それは木でできているのにとこころ紫色をしているというおかしな階段だった。

「まあ、1年位使ってなかったからな。」

きつと、虫がいる。虫が、虫が、ムシガ…。

クモとかクモとかクモとか

「ぎゃああアああアー……」

「ど、どうした？」

マルクはパニック状態の人の心は読めないらしくあたふたとしてる。

「あいつ虫嫌いだからな。とくにクモとか。」

「そうか。多分地下には沢山いるぞ。」

『ご愁傷様ですッッッ』

珪吾は心のなかで翔に黙祷をつげた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2975q/>

非日常は突然に

2011年1月26日06時41分発行